

文 樂 評 切 拔 帳 (二 月)

嫩軍記の通しと

古靱の「沼津」

西尾福三郎

今月の二部制には尠くとも先月よりは苦心の跡が見える。蓋の「嫩軍記」の通しはこの前の痕だらけの忠臣蔵より數等勝る。須磨浦組打の前に敦盛出陣を付け、陣屋の前に脇ヶ濱を出した事で大體三段目迄の筋が通つて見物教育には好適である。本の整理は先づ申分なしとして、太夫三味線人形の配置に於ては脇ヶ濱の新左衛門と陣屋の大隅、清二郎それに仙丞以外に取るべきものがない。人形は玉造の熊谷以外は若手許りだが、これは夜の本格興行に對する修練道場の意味で出来の良否は第二として交代抜擢の方法で行くがよく、そのうち案外な掘り出しものがあるかも知れず、特に公開の機会に恵まれない人形陣に於

てその必要を痛感する。

夜の部は「千兩轡」を除いて何れも佳品が揃つた。古靱の「沼津」は久しぶりでこの人のどつしりした生世話物の味をたつぷりと堪能させ、殊に千本松原の條りが際立つて印象に残る。這がに群衆の上の秀峯に接し得た感がある。平作が故人津太夫の味ところつと變るのも當然ながら興深く、人形も榮三の重兵衛、文五郎のお米、門造の平作と各々粒が揃つた。

「千本櫻」の道行きは榮三、文五郎の爲めの記念的上演で今更乍ら息の合つた組合せに、伊達と織、それに喜左衛門以下の面々、何れも手なれたものだけにこちらも耳なれて又かと思はぬでもないが、こゝらが純米の味同様に正に結構と申すものか。

「太十」は南部と織が受持つていづれも持味を生かしてゐるが、就中今月の織太夫は二つともにいゝ所を當てがはれて久しぶりで全幅

的な藝を見せてゐる。この二人に劇場出稼ぎはよい加減止めて貰つて、この際もつと死身になつて次の時代の爲めに文樂戦場の氣持で戦つてほしいものである。(讀賣報知)

古靱の原文主義

古靱の「沼津」はさすがに圓熟さを聞かせる、冒頭の「東路に」の調子が少し減入つてゐる以外は重兵衛の淡々たるうちに急所を外さぬところ、平作の行届いた愁ひの利かせ方いづれも立派な出来栄だが、ただ一つ古靱に質したいのは、この人の原作主義についての疑ひである、例へば段切の平作の「南無阿彌陀佛」を省略するやり方への疑ひである、勿論この一句は原作に平作と確たる指定はない、恐らく後世添加された技巧なのだらうがしかし、これはむしろ原作に加へた先人の工夫として、また技巧の花として一應尊重してもよろしくはないか、古靱のことだけにこの省略については一家の見識があらうと思ふが原作主義といふよりはむしろかうした逐字的な古靱の原文主義は一度熟考したいと思はれる。

織と團六の「尼崎」は若さと聲量とを一杯

に使つて潑刺、人形では玉造の光秀が熱演のあまり神經を使い過ぎてゐる、もつとおほやかな味がほしい。〔山〕〔毎日新聞〕

文樂の英斷

「嫩軍記」の面白さ 文樂二月の晝の部は珍らしく「一谷嫩軍記」の通しを観せる、通し狂言といへば近來「假手本忠臣蔵」「伊賀越道中双六」「菅原傳授手習鑑」「義經千本櫻」の四狂言に決つてゐる觀がある、さうした常套性を打破して深く民衆に親しまれてゐる「一谷」を上演したことは最近における文樂興行企畫として大英斷であると共に良心的である點大いに稱讃すべきである、またか復かと同一狂言の繰返しのみ觀せられ續けて來ただけ「一谷」の通しは最近非常に面白く十分樂しめた

さて「敦盛出陣」の津磨はもつと輝を通すこと、司、縫ともに筋の説明のみに終るが缺點、友造の絃は艶のあるのがよい「陣門」の長尾は力と力の相搏つ戦場の一駒を、全肉體を酷使しての熱演で好もしいが、今一步といふ物足らなさがある「須磨浦」の呂賀は美しい聲が身上、だがその美聲を徒に振りまはしてゐるはしないか、自分の特徴を生かす工夫が

肝要で「組打」の住は急所々々をぐつと押へて今月もヒットを放つ「一谷」全篇の山である「陣屋」が呂の極端に聲を殺した不明瞭な語り口と大隅の熱演乍ら、何んとなく間のびした語り口とが迫力を缺いてゐるだけ、晝の部はこの「組打」が全篇の山となつてしまつた。

「一谷」が平家没落の悲哀を取扱つてゐる點「軍記物」と同一でその主題は單なる戰場武勇の物語ではない、勇士の忍苦と犠牲の精神生活に最重點を置いて語らるべきである、敦盛を通じて滅び行く平家一門に對する哀傷は敦盛の死を歌ふ哀泣の詩である。

住はこの源平時代の武士の背負へる悲しみ自己の背負へる運命に對する慟哭を語つてくれた。呂、大隅に對する不満はこの悲しみから

「一谷」の悲劇を成立させてゐることから悲劇精神の追求がなされない點にある「脇濱」の掛合では隅若の尙ぬれぬの與次郎が秀れてゐる、清二郎の絃は相變らず元氣横溢でよい。

人形では紋司の玉織姫の初々しさが政龜の藤の局の淡々たる動きの中に感じる悲哀とともに眼に残る。玉造の熊谷は柄でありながら今一つ物足らなさを感じる。

壓巻の「太功記」 夜の部では最後の「太十」が一番感銘が深かつた「千兩戰」は重、七五三等の掛合ながら、性格の格闘が薄

藝界展望

▽……文樂座四月興行

一日初日、晝の部

通し狂言「本朝廿四孝」桔梗ヶ原（口）、むら改八十、松島、錦糸、中、つばめ、友造次、濱、寛治郎「景勝下駄」（七五三、友衛門）勘助住家（大隅、清二郎）物語（住、吉三郎）景勝上使（隅若、友平）十種香、（切、重、廣助）狐火（三浦改叶、清八）人形——越路（政龜）慈悲藏、八重垣姫（龜松、光造一日替り）お種、勝頼（榮三郎）横造（玉助）濡衣（紋司）

夜の部 橋本關雪原作、西亭脚色、作曲、「佐藤兄弟の妻」（相生、織、伊達、道八吉五郎、團六外）「戀女房染分手綱」道中双六（源、宮、友花改燕三、勝太郎）重の井子別れ（織、團六）「戀飛脚大和往來」、新口村（中、宮、團伊三、切、古親、清六）壇浦兜軍記（阿古屋、伊達、重忠、相生、觀西翁、喜左衛門外）人形——佐藤兄弟の母、孫右衛門（榮三）重の井文五郎（梅川阿古屋、紋十郎）岩永（玉助）忠兵衛（龜松）

弱で印象が薄い、重のおとわは平凡過ぎ濱の猪名川は重荷で七五三の銭ヶ嶽がこの太夫の藝實を感じしめる「千本櫻」道行は朝日文化賞受賞を記念したもので榮三が忠信文五郎が静をつかふ絢爛の一場面であるが、文五郎風邪の爲紋十郎が代役で兩者のイキが完全に合はず、折角の記念上演が變なものになったのは惜しい、名人文五郎の回復を祈つて止まぬ「伊賀越」の沼津は古観で先月よりも聴きよい、榮三の重兵衛が一人光つて名人振りがよく窺はれる。

「繪本太閤記」尼崎は前を南部が重造の絃で語るがこの太夫最近のヒットである「嫁女あつたら武士をむざむざ殺しにやりましたなう」以下「思ひ餘つた三三九度婆々が心の切なさを推量しやと計りにて」がこの段の生命である、亂世の武人の家庭は夫を子供を絶えず戦場に送り出さねばならぬ、然も光秀は叛逆の徒として榮えることなき死に臨んだ人間であり十次郎も亦初陣に潔く死んで行く若武者である、祖母、母親、新妻にとつてこれは何んといふ苛酷なる運命であらう、だがこの三代揃つて女達はいかに苦惱に堪へて女許りで生き抜かうとする、一番立派な生き方を念じつつここに武人らしい氣高きがあり女達の英雄精神の高きがある。大東亞戦争を身をもつて経験しつつある今日かうした女ばか

りの家庭もあらう、そんな人々は皆一様に高い誇りを以て生き抜いてゐるのだ、南部はかうした女三人の高い精神を懸命に語つて出色の出来、後の幾も大熱演が光秀の背負ふ運命の悲劇を高く盛り上げて感銘の深い「太十」であつた。(大阪新聞)

朝日賞の文樂

朝日賞にはえる榮三と文五郎の記念上演は「千本櫻」道行である。兩名人の得意中の得意な出し物だし、床も伊達、織らの賑やかな掛合で喜左衛門以下が豪勢に棒を描へる。この上ない花やかな舞台だが記者見物の日、文五郎は風邪のため中途で紋十郎に代りそのまゝ休んでゐる由だが、折角の記念興行に樂しめぬ憾みよりもこの至寶的存在の自重を喜びたい。「沼津」でも兩名人が顔を描へるはずだつたが、これは榮三と古観の至藝で堪能させられる。榮三は例の通り重兵衛に越つて平作を壓してしまふが、門造の平作も手なれて悪くはない。晝の若手を中心にした「嫩軍記」では住の「組打」は力強く、呂、大隅の「陣屋」も熱演に生きる。「陣屋」は昨年一月古観の出し物で榮三らが朝日賞を獲た狂言で、それに比べるのは無理だが玉造の熊谷はじめ人形も一通りだし、近頃珍しい通し上演の樂しさを十分味はせた。(K)朝日新聞

佐藤嗣信の妻(光造) 佐藤忠信の妻(榮三郎) 三吉、棒源(紋司) 重忠(門造)

▽……東京歌舞伎座 吉例園菊祭、三月初日、第一部「先代萩」御殿、床下、刃傷、

九條武子作「四季の曲」「源氏店」羽左衛門菊五郎組、第二部「清正誠忠錄」「大森彦七」「河内山」質店より玄關先迄、幸四郎吉右衛門組

▽……明治座 一日初日、菊池寛作「海征かば」「番町風屋敷」「高野物狂」「膝栗毛」猿之助、壽美藏

▽……新橋演舞場 一日初日、眞山青果作「元祿忠臣蔵」泉岳寺「修善寺物語」長谷川伸作「五文叩き」前進座

▽……神戸松竹劇場 一日初日晝「先代萩」花水橋、竹の間、御殿、床下、對決、刃傷

通し、夜「一の谷」須磨浦と陣屋「良辨杉」櫻の宮、二月堂「女尻り駕」梅玉、壽三郎宗十郎

▽……京都南座 一日初日、ひる「太功記」尼ヶ崎「出陣」「堀川」河原より猿廻し迄

「梅ヶ枝」「良寛と子守」よる「臺坂」「道行初音旅」「名残の名月」「道成寺」又一郎袋助、富十郎、我當、甕雀